

---

# 代理の神の徒 ~バルセイークの場合~

roon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

代理の神の徒 ～バルセイークの場合～

### 【Nコード】

N5493Y

### 【作者名】

roon

### 【あらすじ】

多くの神が存在し、信者に対して力を分け与える世界バルセイーク。この世界最大の国ラゼウスの王都に住まう孤児のステインは、ある神の唯一の信者として生活していた。 \*多分亀更新となります。

## プロローグ（前書き）

以前からチートっぽい話が書きたかったので、挑戦することになりました。

この作品はプロットが途中までしかできていないので、かなりの亀更新&途中打ち切りの可能性がある作品になります。

それでも良いという方のみお読みくださいませ。

## プロローグ

月が真上に来る刻、一人の子どもが大神殿で祈りをささげていた。この世界、バルセイークには主神アーレルを中心として多くの神々が存在しており、人々はその中の一神を選び信仰することで、各々の神の力を分け与えられていた。

神を定めるのは物心つけばいつでも構わないが、成人までにどの神も信仰していないものは”神無者”として虐げられる。また、幼い頃から信仰している方が神から力を得られることが多いため、人々の多くは子どもの頃から信仰する神を定めていた。

「（ヴァーリア神様、僕の祈りを受け入れてください）」

子どもは一心に神に向かって祈りをささげる。

祈りが届かなければ、信者となることは出来ない。祈りを捧げ、その祈りを神が受け入れることによって始めて信者となるのだ。

「（ヴァーリア神様・・・）」

自らが信仰したいと思う神に子どもは祈りを捧げ続ける。

どのくらい時間が経ったのだろう。

不意に子どもに語りかける声があった。

【私に祈りを捧げる人は初めてだよ】

「（ヴァーリア神様・・・？）」

顔を上げると、白い衣に身を包んだ男性が宙に浮かんでいるのが見えた。

【ごめんね。さっきまで仕事をしていたから、君の祈りに応えてあげられなかったんだ】

長い白髪を揺らし、男性は子どもの前に降り立つ。そして、子どもを抱き上げた。

【ずいぶんと若い子だね。まだ、神を定めるには早いだろっに】

普通、神を定めるのは8歳〜10歳が多い。代々同じ神を信仰している家ではもっと早くに定めてしまうことが多いが、この子どものように一人で定めに来る場合はもっと大きくなってからだ。子どもの見た目ではまだ6歳くらいだろっから、さすがに早すぎる。

【それに、こんな真夜中に神定めに来るなんて。人買いに攫われてしまっかもしれないよ】

いくら神定め儀が神殿でしか行えないとはいえ、神官のいない、こんな真夜中にやってくるものはかなり少ない。闇を司る神や人々から邪神と言われているような神を定める場合はともかく、男性・ヴァーリアはそのような神ではない。昼間でも良いはずだ。

不思議そうに子どもを見下ろすヴァーリアに、子どもは沈んだ面持ちで答えた。

「……僕……孤児なんです」

【……そうか】

ヴァーリアは表情を歪ませた。

この世界には孤児が多い。神が力を与えているのだからそうそう死なないと思われるのだが、神が力を与えるのは自らを信仰している者のみであり、自らの司る力のみしか与えることは出来ない。そ

のため、戦や災害など突発的な出来事でなくなる者は意外に多い。

孤児は孤児院でしかるべき時まで育てられ、独り立ちするか、身請けと言う名目で売買される。人買いと大差はないが、孤児院に所属している限り人買いに狙われることはなく、独り立ちするまで身請けされなければ自由になれるため、少しではあるが人買いの奴隷よりはましであった。

子どもは孤児であるからこそ、このような夜中でもさらわれる危険は少ないのだろう。

【なら、私よりポーレスやゲルダの方が良かったのではないか？】

ヴァーリアは子どもの頭を撫でつつ、疑問を口にする。

ヴァーリアは今まで誰からも信仰されなかった神だ。ヴァーリアが信仰の許可を与えなかったというわけではなく、事実誰からも祈りを捧げられなかった神である。

神々の名のリストはあるが、そこに記載されている名は膨大すぎて、見落とされたり最後まで見てもらえなかったりすることがほとんどである。その中から自分を見つけた子どもも凄いが、自分を信仰しようと考える子どもがヴァーリアはとても不思議だった。

ヴァーリアが挙げた神は、誰でも知っているような有名かつ与えられる力が有益な神の一族であり、出世を望む者はこぞってこれらの神を信仰対象と定める。

孤児の子どもが、それらの神を置いて自分を選ぶ理由を、ヴァーリアは思いつけなかったのだ。

子どもはピクリと肩を揺らし、フルフルと首を振った。

「僕、貴方様がいい」

【どうして？】

「・・・僕、自分だけの神様が欲しかったんです」

ポツリポツリと話しだす子どもの髪をヴァーリアは静かに梳いた。

「・・・孤児院では、自分だけのものが貰えないから、神様だけは自分だけの欲しかったんです」

多くの人に信仰されているということは、多くの人に目をかけてもらっているということ。

子どもは、それが嫌だった。力を与えられずとも、傍にいてくれなくとも、自分だけを見てくれる神が欲しかったのだ。

「・・・こんな理由では、駄目ですか？」

泣きそうな顔で見上げてくる子どもに、ヴァーリアは目を丸くした。

【（この子は・・・）】

ただ、それだけの願いを叶えるために、こんな真夜中に一人祈りを捧げにきたということに、ヴァーリアは苦笑を禁じえない。

今まで信者がいなかったのは、誰も人が信仰したことのない、何を司っているかも不明の神を信仰したいと思うものが存在しなかったからである。

神が人と積極的に交流を始めたばかりの頃は、人々も神の司るものを知らず、あまり深く考えずに神を定めていた。しかし、時が過ぎるごとに神々ごとの特徴や司る力が明らかにされ、現在では人々は自らの将来を見据えて最も都合の良い神を定めるようになり、能力の知られていない神はほとんど忘れ去られていた。リストに名前を見つけても、その特徴や司る力についての記載が無ければ、誰も選ぶとはしないのだ。

その点で言えば、どのような理由であろうと、力を考慮せず、純

粹に自分を選んでくれた子どもはとても好感が持てた。

【・・・よし！ 君だけの神になってあげよう】  
「！」

子どもは驚いた。

「い、いいんですか？」

【もちろん。永久にとは約束できないけど、君が生きているうちは君だけが私の信者だ】

ヴァーリアの言葉に子どもの目に涙が浮かぶ。声を出さずに泣く子どもをヴァーリアは静かにあやした。

子どもが落ち着いたところで、ヴァーリアは再び子どもに声をかける。

【君の名前は？】

「ステインです」

【じゃあステイン、君は今日から私の信者だ。いいね？】

「はい！」

嬉しそうにステインが頷くと、途端に左手の甲に模様が浮かびあがる。

神との契約の証だ。

それを見て、泣き笑いをするステインにヴァーリアは苦笑した。

【では、私の愛し子となった君に力を授けないとね】

「・・・ヴァーリア神様は、何を司っているんですか？」

涙をぬぐい、不思議そうに見つめてくるステインにヴァーリアは



困ったように笑った。

【うーん・・・特に司っているものがあるわけではないんだよ】  
「ない・・・ですか」

【私は代理の神だからね】  
「代理？」

よく分からず、首をかしげるステインをヴァーリアは楽しそうに眺めた。

【そう。他の神が忙しくて手が回らないときに、力を貸すのが私の仕事。だから、他の神が出来ることは全て出来るけど、私だけが司っているものはないんだ】

「???」

【君には、まだ難しいかな？】

うんうんと頭を抱えているステインにヴァーリアは苦笑した。

【詳しいことはそのうち分かるだろう。さ、目を閉じなさい】

言われるままに、ステインは目を閉じた。ヴァーリアはステインの額に手をかざし、力を送り込む。

【これでいい】

ステインは目を開けた。自らを見下ろしてくるヴァーリアを静かに見上げる。

と、頭に激痛がはしり、ステインは頭を抑えた。

「っ・・・!」

【おやおや。無意識とはいえ、もう力を使いこなそうとするとは優秀だ。でも、まだ神に対して使っては駄目だよ。君の身体が壊れてしまう】

ヴァーリアがステインの頭を撫でると、ステインの頭から痛みが消えた。

【優秀なのも問題だね。使いこなせるようになるまでは、神に対しては使えないようにしておこう。それでも強い力だから、無闇に使わないようにね】

「はい」

力強く頷くステインをヴァーリアはそつと降ろした。それから、ステインの前に屈みこみ、視線をステインと合わせる。

【最後に一つだけ。・・・君に与えた力はあくまでも他者から力を借りるものだ。それを忘れてはいけないよ】

「はい！」

真剣に返事をするステインの頭を、ヴァーリアは軽く叩いた。

【さ、もう帰りなさい】

「はい。あ、ありがとございました」

ステインはぺこりと頭を下げた。

【気をつけて帰るんだよ。初めての信者を一日で失いたくないからね】

立ち上がり、穏やかな笑みを浮かべて見下ろしてくるヴァーリア

に、ステインは再び涙ぐんだ。

「ま、また会いにきても、いいですか？」

【もちろん。私は君の神なのだから。但し、会えないときもあるがね】

ヴァーリアの返事にステインは笑みを浮かべる。

【君の事を、遠くから見守っている】

最後に軽くステインを抱きしめ、ヴァーリアは姿を消した。ステインは目尻に残った涙をぬぐうと、大神殿を後にした。

## プロローグ（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

a c t 1・(前書き)

年齢を書き忘れました。

この物語はSTEIN 14歳からのスタートです。

バルセイーク最大の国ラゼウスの王都には、少し変わった孤児院がある。

ここでは、10歳になった子どもたちは孤児院側の要請で街で仕事を与えられ、身請けされるか独り立ちするまで孤児院を維持するための費用を稼ぐ制度があった。これは孤児院の経営のための策であり、かつ身請けや独り立ちを可能にするための策でもある。

人身売買が禁止されていることもあって特に孤児が多い王都では、孤児院の費用がかなり必要になるため、働ける年齢に達した子どもにまだ働ける年齢に達していない子どもの面倒を見させるという名目で仕事を任せる。これは子どもたちに孤児院内の年功序列の観念を植え付けるとともに、独り立ちへの展望を持って貰うという意図が働いている。仕事をやってみることで、自分の向き不向きや好き嫌いを判断することが出来るためだ。

実際、この制度によって仕事をしている間に働きを認められ、身請けされる者は多く出ているし、まだ独り立ちする年齢に達していなくとも独り立ちしていった者も少なからずいる。それに、子どもに仕事の手伝いを頼む側も、多少能力は劣るものの大人に頼むより格安で引き受けてもらえるということもあって、様々な職種の者が利用していた。

この孤児院に所属しているステインもまた、この制度によって王都の1画にある食堂で給仕の仕事をしていた。

「こつち、麦酒一杯な！」

「はい、ただ今！」

「お会計をお願いしたいんだが」

「はい、しばらくお待ちください！」

仕事は忙しいものの、半年以上続けているため、多少の慣れがある。ステインはてきぱきと仕事をこなした。

「ステイン、そろそろ上がんな」

「はい」

食堂の主人から声をかけられ、ステインは返事をする。残りの仕事を片付ける。それから、給仕用のエプロンを外し、所定の場所に仕舞うと主人の元へと向かった。深々とお辞儀をする。

「今日も、ありがとうございました」

「おう、こちらこそ助かった」

いつになく歯切れの悪そうな主人の様子にステインは首を傾げた。

「……いや、娘が完治したからな」

「治られたんですか。おめでとうございます」

素直に祝辞を述べると、主人はますます顔を歪める。

「……それで、だ。明日からは娘が入れるようになるから……」

しどろもどろに言葉を続ける主人に、ステインはニコリと笑いかけた。

「でしたら、明日からは来なくて良いんですね？」

「まあ……そういうことだ」

「分かりました」

元々、この仕事は事故で大怪我を負った主人の娘が働けるように

なるまでという条件で孤児院に持ち込まれたものであり、請け負ったステインも了承済みである。

ステインからすれば特に気にならなかったが、主人の方には色々気になる場所があったらしい。頷いたステインに、主人はあからさまに安堵のため息をついた。

「本当に、今までありがとな。俺としてはずっと働いてもらえると助かるんだが、ウチもそこまで賃金は出せねえんだ。すまん」

「いえ、大丈夫です」

「食べるものに困ったときは来な。残り物くらいは分けてやるから」  
「ありがとうございます」

いくら孤児院の孤児とはいえ、破格の扱いである。ステインは嬉しそくに頭を下げた。

「じゃ、またな」

「失礼します」

もう一度頭を下げ、ステインは食堂を後にした。夕暮れに染まる街をゆつくりと歩き、岐路に着く。

その足取りは軽い。

「（今回の職場は良い所だったな）」

10歳になってから、様々な場所で臨時の手伝いをしてきたが、今回の食堂が最も期間が長く、多くの客が訪れたため、ステインにとって都合が良かった。

最近も客も固定になり、少し飽きていた所だったので、辞められて丁度いい。



「（次は、どんな仕事に就こうかな）」

孤児院に要請が来た職場に行くことになるため、あまり選べるわけではないが、全く選べないよりはずっと楽しい。

ステインは鼻歌交じりに孤児院への道を辿る。

と、その肩をポンと叩かれ、ステインは驚いて振り向いた。

悪戯が成功した子どものような表情をした、見知った顔に、無意識に笑みがこぼれる。

「よ、ステイン」

「リオール、久しぶり。どうしたの？」

「臨時の休みをもらったから、久々に帰ろうかと思ってさ。院長にも会いたいしな。お前は仕事の帰りか？」

「うん」

話しながら、二人は孤児院への岐路へついた。

ステインとリオールは孤児院の同期であり、同い年でもある。それもあって、二人はとても仲が良かった。

リオールは一足先に独り立ちしてしまっただため、以前ほど顔を合わせなくなったが、時々こうやってステインの元を訪ねてくる。一応他にも目的はあるのだが、わざわざ会いに来てくれるのは嬉しい。

「リオール、また背伸びたね」

「そりゃあ、毎日鍛えていれば伸びるさ。そーゆーお前は相変わらずちっこいな」

「そのうち伸びるよっ」

「どうかな」

「・・・もっっ」

ステインはそっぽを向いた。

騎士団の入団試験を最年少でパスし、騎士見習いとして早々に独り立ちしたリオールは、元々孤児院のどの子ども達と比べても背が高く、体格も良かった。それとは真逆で、子ども達の中でもひと際小さく、年下の子ども達からも年上と思っってもらえなかったステインをからかうのは彼の趣味のようなものだ。何年経っても止めようとしないのでから、いい加減軽く流せるようになっていたのだが、中々感情がついていかない。

それもまた、腹立たしい。

「そんなにちつこいのが嫌なら、お前も入団すればよかつただろ。

お前なら一発で入れるだろうが」

「入ったから伸びるってものじゃないし・・・人の”力”を借りて入ったら、自分が入ったことにはならないよ」

「・・・真面目だな、相変わらず」

リオールは軽く溜息をついた。

彼はステインが信仰している神と与えられた力のことを知っている。その力をステインが極力使わないようにしていることも。それを勿体ないと彼は常々思っていた。

「別に、使っちゃいけないって言われてるわけじゃないんだろ？

少しくらい自分のために使ってもいいんじゃないか？」

「・・・他の人の努力や持って生まれた才能を勝手に使わせてもらってるんだから、自分の利益のために使うのは絶対ダメ。この力はとても便利だけど、使いすぎて力があることに慣れちゃうと困るからね。自分で出来ることは自分でやらないと。それに、弱点もあるんだよ」

「弱点？」

「そ。力に頼り過ぎると、力がないと何も出来なくなってしまうんだ」

ステインに与えられたヴァーリア神の力は、『他者の持つ能力をそのまま自らのものにする力』である。たとえば、魔術を使っている所を見れば、見た魔術を使うことが出来るようになる。同様に、料理でも、剣技でも、見たものは使えるようになる。現在では、相手を見るだけで、相手の持っている技能、先天的な才能、種族の特徴などあらゆる能力が使えるようになっていく。

しかし、これらの他者から得た力を使うのは身体に負担がかかるし、得た能力以上のものは会得できないという欠点がある。たとえば、国一番の魔術師の能力を得たとしても、その魔術師を超える人物になることはなできない。それに当然のことだが、他者から得た能力を使うと、自分の身に付かないのである。力がなければ何も出来ないのと同義だ。

力に頼ると、自分の中にある将来の可能性は潰える。それは力を与えたヴァーリア神にとっても、ステイン自身にとっても望まないことであった。

「あと、実力でどこまで出来るか知りたいっていうのもあるし、僕だって全く使っていないわけじゃないよ」

少しばかりムツとしたステインに、リオールはため息を返す。

「自分のために使っていないだろ」

リオールが孤児院にいた頃から、ステインは自分の力を人のために使っていた。孤児院は大人の人手が少なく、1人でも怪我や病気で休まれると孤児達の面倒を十分にすることが出来なくなる。ある程度の年齢に達した孤児が手伝いをしているが、それでも薪割りなど仕事によっては子どもでは出来ないこともある。そういう場合、ステインがこっそりと力を使って手伝っていたことを知っている

リオールとしては、呆れるしかない。

そう言うリオールが、実は一番ステインから恩恵を受けているのだが。

「自己満足も、自分のためだよ」

「・・・あー、分かった。もういい。お前が良いんじゃない」

いつも言っても言っても伝わらないのだ。無駄なことはしないほうが良い。リオールは強制的に話を切った。

「まあ、独り立ちするまでにどうしても進路が決まらなかったら、力を使うことも考えようかな」

「そのときは俺のここに来な。決まるまで家に置いてやる」

「居候ってこと？ 迷惑じゃない？ 中々決まらなかったらリオールが困るでしょ」

「もちろん、居る間は色々とやってもらうぞ。家事とか、武器の修理とか。有能な家政婦雇ったと思えば高くはないさ」

「・・・りょーかい」

半分本気だろうが、半分は善意なんだろう。にやりと笑うリオールに、ステインは苦笑いを返した。

a c t 1 . ( 後書き )

読んでくださり、ありがとうございます。

a c t 2・(前書き)

切りの良い所で止めたので、今回は少し短めです。

他愛無い会話を続けているうちに、二人は孤児院へと辿り着いた。中へ入ると、粗末な服に身を包んだ女性と幾人かの子ども達が洗濯を抱えて運んでいるのが見えた。

子どもの一人が二人に気づき、女性の服の裾を引く。女性は顔を上げ、二人に気づくとやんわりと微笑んだ。

「お帰りなさい、ステイン」

「ただいま戻りました」

「リオール、お久しぶりですね」

「院長先生、お久しぶりです」

二人は同時に頭を下げる。上げるタイミングも全く同じ二人に、  
院長 エルマはくすりと笑んだ。

「二人とも、相変わらずだね。さ、お上がりなさい。リオールも、今日は泊まっていくのでしょうか？」

「そのつもりですが・・・部屋は、空いてますか？」

「空き部屋はないけど、ステインの部屋に泊まればいいわ。まだ同室の子もいないし」

「ありがとうございます」

この孤児院では、10歳に満たない子ども達は5〜10人で一部屋を使わせているが、10歳になり仕事を始めた子ども達は2人で一部屋を使わせている。

その理由としては、10歳に満たない子の出入りが激しさと、仕事を始めた子ども達の体調維持である。王都では、身請けを望む者の多くは出来るだけ幼い子どもを欲しがる。ラゼウスでは奴隷の使

用を禁止しているし、身請けされた子どもは国の庇護のある国民として扱われるため、奴隷のように扱うことはできない。それもあって、まだ神を定めていない幼い頃から育てる方が自分の思ったように育てられて良いと考える者が多く、神を定めていない10歳以下の子どもは早々に身請けされる。例え神を定めていても、10歳に満たない場合は神から与えられた能力やその子ども自身の資質等によって10歳以上の子どもより身請けされやすい。

逆に、10歳を超えてしまった者は、中々身請けされない。仕事をこなしているうちにその働きを認められ、身請けされる者もいないわけではないが、かなり少ない。そのため、孤児院に依頼される仕事をこなし、経験を積み、独り立ちに備える者が殆どである。それを考慮して、10歳を超えた者は仕事の疲れを少しでも癒し、独り立ちの準備を整えるため二人部屋を与えられる。

孤児院でステインと同じ年の子どもはもうおらず、今は10歳を越えた子どもは少ないため、ステインは一人で二人部屋を使っていた。

「あ、院長先生、これお土産です」

思い出したかのように、リオールは懐から大きめの包みを取り出し、エルマに渡した。エルマは洗濯物を落とさないように抱えなおし、包みの中身を確認すると顔を綻ばせる。

「レバンのお肉ね。それもこんなに」

「一匹分なので、一日分にしかならないでしょうが」

「良いのよ。久々のお肉だから、皆喜ぶわ。今日早速使わせてもらうわね」

周りの子ども達から歓声上がる。エルマは洗濯物を他の子どもに任せると、包みを持って奥へと入っていった。子ども達もそれに



ついで奥へと入っていく。

それを見送り、ステインはリオールを見上げた。

「リオール、今日の討伐隊に参加してたの？」

レバンは草原に出る魔物の一種である。魔物の肉は美味だが、すぐに傷んでしまったため、かなりの高級品だ。いくら独り立ちしたとはいえ、リオールの給料では手が届かないはずだ。

しかし、自分で狩れば、関係ない。

リオールは肩をすくめた。

「まあな。自分で倒した魔物は獲物としてもらえるから、持って帰ってきたんだ。牙とかは先に引き取ってもらった」

「レバン倒せるようになったんだね。すごいじゃないか」

レバンは草原に出る下級魔物の中では強い部類に入る。中型犬程度の大きさの兎に似た魔物で、中々にすばしっこく、その素早さを利用して繰り出される牙と爪は十分脅威である。

まだ騎士団に入団して一年しか経っていないのに、それだけの力をつけていることにステインは感心した。

「いや、あれは素早いけど一撃当てれば倒せるから、そこまで強くない。今日も本当はゾーレナーを狩りたかったんだが・・・俺にはまだ無理だった」

苦笑して、リオールは軽く服の裾を捲った。そこには、血に滲んだ包帯が巻かれていた。

「一応手当てはしたんだが、まだ傷が塞がらなくてな」

「・・・大怪我では、ないんだね？」

「当たり前だ。大怪我なら会った時点で言ってる」

飄々と言つてのけるリオールに、ステインはため息をついた。

「……………とりあえず治すから、部屋に行こう」

「いつもありがとな、親友」

にかつと笑うリオールのわき腹を、ステインは軽く殴つたのだつた。

a c t 2 . ( 後書き )

読んでくださり、ありがとうございます。

「うわぁ・・・これ、本当に大怪我じゃないの？」

リオールの腹部に巻かれた包帯を外し、ステインは顔を顰めた。爪で抉られたような3本の裂傷が腹部を走っている。きちんと手当てされているとはいえ、薬の匂いと共にむせ返るほどの血の匂いが周囲に散らばった。

患部に軽く触れると、リオールが少し顔を顰める。

「まあ、痛いっっちゃ痛いんだが、失血するほどではないし、お前のくれた薬がかなり効いたからな。もう血は止まってるし、大丈夫だ」

「あんまり無理しちゃダメだよ」

「いやー、ゾーレナーなら狩れると思ったんだよ。それに、折角の里帰りだからできるだけ良い土産を持ってきたかったしな」

ゾーレナーはとかげに良く似た魔物で、大きさは成人男性3人分はあり、レバンほどではないがすばしっこいし、皮膚も硬い。草原に出る下級魔物の中では強い部類に入る。その肉は下級の魔物の中では最も美味で、主に中級以上の魔物の肉を用いる高級料理店でも使われている程だ。

「それで死んだら意味ないでしょ」

ステインはむっとした顔で外した包帯を側に置かれた桶に突っ込んだ。

「強くなったって、死んだらそれまでなんだからね！」

「……いや、死なないって」

元々、狩れるという確信があったのだ。少し回避のタイミングが遅れて鍵爪の一撃を喰らってしまったが、上手に回避できていたら倒せていた。そんな自覚のあるリオールとしては、ステインに小言を言われると耳が痛い。本気で心配されていると分かるから、余計に。

リオールはしかめっ面のステインを必死でなだめた。

「大丈夫だつて。次はこんなへましないから」

「半年前もそうやって言つて、腕をバツサリやられてなかった？」

「あれは、不意打ちだったから対処が遅れただけだ。もう一体出てくるなんて予想外だったからな」

「独り立ちの前にも、何回か毒受けて顔真っ青で帰宅したよね？」

「通り道に毒蕨の群生地があるなんて思わないだろ？ 不可抗力だ」  
「……」

ステインは額に手を当て、ため息をついた。

「今後は気をつけるから、さ。機嫌直してくれ」

「……」

「おっつ」

元気に返事をするリオールを見てもう一度ため息をつく。ステインはリオールの傷に手を当てた。

と、手の甲に刻まれた刻印が淡く発光する。その後手の平から光が零れ、傷口を塞いでいく。しばらくすると、脇腹は元から傷一つなかったかのように滑らかな肌を晒していた。

「はい、これでよし」

「相変わらず、スゲーな」

「稀代の癒し手、クエナ様の御業だもんね」

「・・・自分で使っておいて、人事みたいに言うのかよ」

「人の”力”だから。僕のじゃないしね」

「（・・・全く）」

てきばきと包帯を片付けるステインに、リオールは呆れたような目を向けた。

「（もう少し誇ってもいいだろうに）」

実際のところ、他者の”力”を得るのはそれほど簡単なことではない。

今は直接対象となる者を見ることで”力”を得ることが可能であるが、まだ力を得たばかりの頃は直接対象が”力”を使う姿を見なければならなかった。そこで、ステインは様々な専門技術を扱う者から”力”を得るため様々な仕事に就き、役立つ能力を持つ者が王都に来た際はできる限り見に行った。おかげで、使用できる能力はかなり多い。

しかし、使用できるとは言っても、それを使いこなすには努力が要る。例えば、身体の中の魔力を用いる

魔術を”力”を用いて使う場合、全く魔力を制御する術を持たずに使えば暴発し、死に至る可能性がある。他にも、獣人特有の声を用以て話す獣人語を”力”を用いて話そうとした場合、人であるステインとは喉の構造が異なるため、そのまま使えば喉を痛め、声が出せなくなるといった難点がある。そうでなくとも、初めて使う”力”は身体に馴染んでおらず、一度くらいならしばらくの倦怠感ですむが、連発すれば身体の負担が大きい。実際、ステインは慣れるまでは何度もぶっ倒れていた。

そんな危ない橋を何度も渡り、身体への負担を軽くするために普

通はする必要がない点で努力を欠かさず、”力”を使いこなしている時点で十分評価されてしかるべきだとリオールは思っているのだが、ステインは決してそれを認めようとしない。「人の”力”だから自分が凄いわけではない」と言い切るのだ。

リオールからすれば、ステインは「頑固者」の一言に尽きる。

「そついえば、もう薬使い切った？」

洗い終えた包帯を椅子に干しながら、ステインはリオールを振り向いた。

「ああ。一個じゃ効果が弱かったからな」

「・・・そつか、まだ弱いのか」

ステインは自分の寝台に近づくと、布団を軽く捲った。その下から薄汚れた紙の束を取り出す。

それから紙を数枚捲り、そこに黒炭を尖らせたもので何かを書き込んでいく。

「じゃあ、もう少し強いやつを渡すね。リオールじゃあ弱いのを使う機会は少ないだろうし」

「いや、弱いのは弱いのであったほうが便利だな」

「そつ？　じゃあ、一緒にいくつか渡すよ」

書き終えると、ステインは再び寝台に紙の束を隠した。その後、寝台の下からボロボロの袋を引っ張り出し、葉に包まれたものをいくつか取り出した。それぞれに、色の異なる紐が巻かれている。

「これが強いやつだから、大きな怪我をした時に使つて。今日の怪我は流石に治せないと思うけど、動ける程度には治ると思う。こっ

「ちはこの間渡した弱いやつね」

「これは？」

「これは毒消し。下級の魔物の毒なら解毒できると思っよ」

袋の中の在庫を確認し、薬を用意していくステインを啞然として眺め、リオールはため息をついた。

「(どんどん非凡になってるな、こいつ)」

今ステインが弱いと言った薬は、数ヶ月前は彼が力無しで作れる最も効果の高い薬だったはずだ。それでも、レバンにつけられた噛み傷が薬を塗って数時間後には消えていたところを見ると、決して効果が弱いということはない。実際、それくらいの効果がある薬は結構高値で取引されている。

そんなものをホイホイと渡してくるステインに、リオールは呆れた。

「あんまり無茶すんなよ」

「平気だつて。今は力使ってるわけじゃないし、力を使ってももうそんなに負担かからないから」

「(そういう問題か・・・)」

「練習しないと覚えられないからね」

「(・・・だめだ、こいつ)」

事もなげに言われ、リオールは片手で顔を覆った。

ステインの力は、最初は一度”力”を使うだけでも結構な身体の負担になるが、同じ”力”を何度も使っているうちに身体に馴染み、完全に慣れれば全く身体に負担をかけずに使えるようになる。そのため、彼は暇を見つければ練習のために”力”を使うようにしている。しかも、仕事に支障が出ないよう1日に何度も繰り返したりは



しない。そのせいか、そのうち”力”に頼らずともできるようにすることもある。例えば、知識とちよつとした体験があればできる薬の作成や魔術、料理はその類のものだ。もちろん、”力”を使って  
する場合は失敗することはないが、身体に負担をかけずに同様のこ  
とが出来るといふのはステインにとって魅力的なので、慣れてくる  
と”力”を使わずにやるようにしていた。

しかし、その段階にするまで”力”の使いすぎでフラフラしてい  
る様子を何度も目の当たりにしてきたリオールは呆れるしかなかつ  
た。

「お前、もうちよつと休息取らないと、背伸びないぞ」

「う……分かつてるよ」

ステインが徹夜常習犯な上、フラフラになっているときは食事を  
抜くこともあると知っているリオールは、いつもこつして釘を刺す  
ようにしている。効果があつた例はほとんどないが、言わないより  
はましだ。

「やーい、ちび。寝ないからおつきくならないんだぞ」

「うるさいなっ」

「（こんだけ言えば、今日は寝るな）」

飛んできた枕やら薬の包みやらをかわしつつ、リオールはニンマ  
リと笑った。

a c t . 3 (後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5493y/>

---

代理の神の徒 ~バルセイークの場合~

2011年12月11日18時49分発行